The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | Co* Design　no.3　投稿規程 |
| Author(s) | |
| Citation | Co＊Design. 2018, 3, p. 97-104 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/67897 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 投稿規程の見直しについてのお知らせ（編集委員会）

『Co＊ Design』第2号より、論文、実践報告および研究ノートの投稿区分を廃止し、レポート（報告）とします。投稿ならびに依頼原稿からなりますが、すべて編集部による査読あるいは閲読を受けるものとします。これらのレポート（報告）には［投稿年月日］と査読・閲読後の再投稿を経た［受理年月日］が文章末に記載されるようになります。なお諸般の事情により受理の時期が遅れる場合は、その掲載を次号送りにすることがあります。

細かい変更点については、巻末の『Co＊ Design』（COデザインセンター紀要）の「投稿規程」ならびに「執筆要綱」をご参照ください。

2017年8月1日

COデザインセンター紀要『Co＊ Design』編集委員会

内田みや子

山崎吾郎

田中均

平川秀幸

林田雅至

池田光穂（委員長）

# Co* Design（COデザインセンター紀要）

**投稿規程**

## 1＿投稿者の資格

◎ 投稿者のうち少なくとも1名は、大阪大学の教員・研究員、および学生を含むこととする。
◎ ただし、Co* Design編集担当（以下、編集担当）が承認または原稿執筆を依頼したものについてはこの限りではない。

## 2＿投稿内容・種類

### 2.1＿投稿内容

◎ 投稿原稿の内容は自由であるが、広義の高度汎用力（超域イノベーション、コミュニケーションデザインを含む）の概念・実践・教育方法の開発に寄与するものを対象とする。
◎ 原稿の対象は、レポート（報告）のみとする。

### 2.2＿種類：レポート（報告）（すべての投稿で査読あるいは閲読あり）

**レポート（報告）には、下記のような内容を含む。**

◎ 当該分野における新しい研究・開発の成果の記述で、研究の対象、方法、あるいは結果に独創性、創造性があり、かつ明確で価値のある結果や事実を含む。

◎ 教育、および社学連携等の実践報告

◎ 技術報告（設備・装置・ソフトウエアなどの設計・試験・運用・評価などの新しい経験やその結果の報告で、実用的価値のあるもの）

◎ テキスト以外（画像・音声・映像等）を中心とした形式の投稿も可能とする。ただしその場合であっても、その背景や著者の意図に関する記述（1,000文字以上）を含むこととする。

◎ その他
- 短報（速報）：今後論文にまとめる予定の試論、又は速報的なもの。
- 資料：論文のスタイルに収まりにくいもの。委員会・研究会が集約した意見・報告書など。
- 編集者への手紙（letter to editor）：論文に対する意見、編集に対する意見など。
- 書評：書物に対する評。

## 3＿投稿原稿の作成及び提出

### 3.1＿原稿の様式

原稿の様式は、別紙執筆要綱による。なお、編集担当において表記等をあらためることがある。

### 3.2＿受理日

投稿原稿が編集担当に到着し、査読を受けた後、修正がある場合はその改訂稿が提出された日付をもって原稿の受理日とする。査読による修正が無い場合は修正なしで掲載可と通知された日をもって原稿の受理日とする。

### 3.3＿内容

投稿原稿の内容は、原則として他の書籍・雑誌において未発表でかつ査読中でないものとする。

## 4＿査読・閲読手続き

### 4.1＿査読・閲読の対象となる原稿

投稿されたすべての原稿について査読・閲読を行う。なお査読（peer review）とは、投稿者と専門を同じくする者による採否審査のことであり、閲読（review）とは外部への依頼者を含めた編集委員を中心として合議に基づく採否審査のことである。査読と閲読の実態が合致しなくても、本誌では、掲載後にもし外部からの照会があった場合には「適切なレビュー（proper review）」行った旨の回答をする。

### 4.2＿査読者の選出等

投稿された原稿について、編集委員あるいは編集委員会が依頼した匿名のレビュアーが査読・閲読を行う。

### 4.3＿投稿原稿の採否

査読・閲読の結果に基づいて編集委員が決定し、投稿者に通知する。

### 4.4＿原稿の修正

◎ 査読等照会事項について原稿の修正を行う場合は、編集担当が指定した期間内に書類一式を再提出する。
◎ 著者校正は1回とし、再校以降は編集担当が担当する。

## 5＿著者校正

◎ 著者校正は1回とし、再校以降は編集担当が担当する。
◎ なお、マルチメディアの投稿原稿等については、配信上の加工が必要とされる場合、編集担当と著者との間で事前に協議することがある。

## 6＿媒体

◎ Co* Designは、大阪大学学術情報庫（OUKA）を利用したオンラインジャーナルの形態で公開することを原則とする。

## 7＿著作権

◎ 本誌に掲載された内容については、投稿者に著作権があるものとする。
◎ また本誌は電子版も発行し、原稿は原則として大阪大学学術情報庫OUKAにPDFファイル又はその他の形式で掲載するため、著者はこれについての著作権上の複製権及び公衆送信権を大阪大学COデザインセンターに対して許諾することとする（これに掲載することを許諾しない場合は投稿時に必ず本人が申請するものとする）。
◎ また投稿において著作権者の存在する写真、図版、資料を引用する場合には、投稿者が責任をもって許可を得ておくこと。

## 附則

◎ この規程は、2017年8月から施行する。

執筆要綱

## 1＿原稿の作成

原稿はワープロ・パソコンのワープロソフトを使用し、A4 用紙に横書きで作成することを基本とする。文字数は、本文、図表、資料、注、引用文献などの全てを含めて下記の通りとする。

### 1.1＿原稿分量

ここでいう「原稿」には、テキスト主体の原稿のみならず、画像・音声・映像主体のものも含む。

**レポート（報告）**

『Co＊ Design』 第２号より、論文、実践報告および研究ノートの投稿区分を廃止し、レポート（報告）とする。投稿ならびに依頼原稿からなるが、すべて編集部による査読あるいは閲読を受けるものとする。これらのレポート（報告）には［投稿年月日］と査読／閲読後の再投稿を経た［受理年月日］が文章末に記載される。受理の時期が遅れる場合は掲載を次号送りにすることがある。

**レポート（報告）の構成と分量**

（1）レポート（報告）の構成

外国語の場合の構成は、タイトル、著者の氏名と所属、著者情報（電子メール、URL）、アブストラクト、キーワード、序文、方法、結果、考察、結論、脚注、リファレンス（文献）、付録ないしは補足資料、邦文要約、［投稿年月日］［受領年月日］を基本とする。日本語の場合は、タイトル、著者の氏名と所属、著者情報（電子メール、URL）、要約、（外国語による）アブストラクト、キーワード（keywords）、序文、方法、結果、考察、結論、脚注、リファレンス（文献）、付録ないしは補足資料、邦文要約、［投稿年月日］［受理年月日］を基本とする。なお、これらの基本構成が守られていれば、順序や構成に変更を認めることとする（→2.1 原稿の構成、を参照）。

（2）テキスト主体の原稿の場合

20,000文字以内を目安とする。これを大幅に超える場合には、編集担当と著者とで協議する。その協議の結果、組版および印刷費について課金をする可能性もある。英文抄録は省くことができる。

（3）画像・音声・映像主体の原稿の場合

◎ ファイルの数およびサイズ：　数、サイズともに上限は設けない。なお、OUKAを通じた配信上加工が必要とされる場合は、編集担当と著者とで協議する。

◎ テキストによる記述は、1,000字以上を目安とする。

### 1.2＿本文の文字サイズ

10.5ポイントとし、１頁あたり1,600文字（40字×40行）に入るように設定する。

### 1.3＿提出物

Word文書とPDFをエントリー時に指定された宛先にメールで送付すること。

## 2＿原稿の構成と記載事項

### 2.1＿原稿の構成

下記の順にそれぞれ1行あけて書く。

◎ タイトル、サブタイトル（和文、英文）
◎ 著者名・所属（和文、英文）
◎ 著者情報（電子メール、URL等）
◎ 邦文要約（500字以内）・アブストラクト（200words以内）（テキスト主体原稿の場合のみ）
◎ キーワード（3語程度）（和文、英文）
◎ 本文：序文、方法、結果、考察、結論等
◎ 脚注、リファレンス（文献）、付録ないしは補足資料。
◎ ※［投稿年月日］［受領年月日］※編集部記載

## 3＿図表・画像について（テキスト主体原稿の場合）

### 3.1＿図表・画像を挿入する場合

◎ 図表・画像は、別紙（A4用紙）にプリントアウトして、通し番号・題目・図版説明をつけ、本文中にその挿入箇所を指定する。別に刷り上がり見本も添付する。
◎ 通し番号は、「図1、図2、図3、……」「表1、表2、表3、……」のようにする。
◎ 題目は40字以内とする。
◎ 図表・画像説明（キャプションや出典など）は、図表・画像の一部に組み込む。出典の記載については、「5.引用（参考）文献の記載方法」を参照のこと。
◎ 図表・画像をデジタルデータで提出する場合は、本文中と同一の「通し番号・題目」がわかるようにファイル名を付け、Word、Excel、PowerPointで作成した場合はそれぞれの標準保存形式で、Illustrator、Photoshopの場合はEPS形式で、それ以外の場合はJPEG（最高画質）、PNG等の形式で作成する。
◎ 図表・画像の説明は本文とは別に、本文中の同一の「通し番号・題目」が判るようにファイル名をつけ、「.txt」の拡張子をつける。
◎ なお、映像の挿入については、映像番号と挿入箇所をテキスト原稿に明記する。

### 3.2＿カラーの使用

◎ 文章、及び図表・画像にカラーを用いてもよい。
◎ ただし、印刷媒体では白黒印刷による表記となる。

## 4＿本文の様式

### 4.1＿区分

本文における章・節などの区分は原則として次の通りとする。

◎ 大見出し　→　1　　2　　3
◎ 中見出し　→　1.1　1.2　2.1　2.2
◎ 小見出し　→　1.1.1　1.1.2　1.1.3　2.1.1　2.1.2

### 4.2＿和文の中の句読点

和文の中の句読点は、いずれも、全角の「。」と「、」とする。

### 4.3＿単位

単位は国際単位（SI）を用いる。

### 4.4＿脚注

◎ 脚注を要するときは、原則として本文の該当箇所に脚注番号を附し、本文中の注番号は全ページの通し番号とし、その位置は右斜め上とする。
◎ 脚注は「文末脚注」のみとする。

例：本文中の注番号は、下記の諸例のようにつける。
◎ - - - - によれば[1)]
◎ - - - - になってきたのである[2)]。
◎「- - - - である。」[3)]

### 4.5＿半角入力

アルファベット・数字は半角にする。
和文中の欧文出自の約物や洋数字に所属した約物（例:!、?、/）、単位記号（例:cm、%）は、半角を使う。

### 4.6＿半角かな

半角かなは用いない。

### 4.7＿使用禁止文字

WindowsおよびMacintoshなどに固有の機種依存文字（外字）は基本的に用いない。丸数字「①②③❶❷❸」、ローマ数字「ⅠⅡⅢ」、特殊文字「㈱」「㏆」など。

### 4.8＿その他の入力時の注意点

◎「…」または「‥」を使う。「・・・」や「・・」としない。
◎「ー（長音符、音引き）」と「—（ダッシュ、ダーシ）」を混同しない。
◎ かっこは（ ）［ ］〈 〉《 》【 】〔 〕を使用し、使い分ける。
◎ ＜＞（不等号）と〈 〉（山括弧）を混同しない。

### 4.9＿書式の指示等

書式について、必要な場合（ルビ、脚注の上付き文字等）は朱書きで指示してください。

## 5＿引用（参考）文献の記載方法

### 5.1＿文献リストの順序

文献は、著者名のアルファベット順にしたがって文末で一括に配列する。

### 5.2＿書名等の表記

単行書名、雑誌名、新聞名はイタリックとする。

### 5.3＿その他注意

括弧を用いる場合は、すべて全角括弧（ ）［ ］とする。
書式指定で_とは、半角スペースを示す。

### 5.4＿文献挙示の具体例

#### 5.4.1＿邦文単行書

◎ 著者名の姓と名の間にスペースなどは入れない。
◎ 著者が複数いる場合は、「・（中黒）」で区切って表す。著者が3名以上いる場合は、（他）などで適宜略記することも可。
◎ 著者名（出版年）『書名』出版社の順。

◎（編）（監）および（出版年）の部分に使用する“（括弧）”は、必ず全角にすること。
◎ 半角括弧( ) と全角括弧（　）の違いに注意する。
◎ 編者・監修者などの場合は、（編）や（監）で表す。
◎ 書名の副題を示す場合は、「：」（全角）で区切って表す。（半角の場合は、: となるので注意。）

例
池田光穂（2010）『看護人類学入門』文化書房博文社.
阿部正浩・松繁寿和（編）（2014）『キャリアのみかた：図で見る110のポイント』有斐閣.

### 5.4.2＿邦文論文

◎ 著者名（出版年）「論文名」『誌名』巻（号）：ページ数の順。
◎「所収」などは書かない。
◎「巻」「号」などは表さず、数字と括弧のみで示す。その後に、「：」（全角）をつけた上で所収ページ数を示す。
◎ その他、基本的に邦文単行書の場合と同様に示す。

例
平川秀幸（2017）「避難と不安の正当性：科学技術社会論からの考察」『法律時報』89（8）：71-76.
藤田隆則（1995）「古典音楽伝承の共同体：能における保存命令と変化の創出」福島真人（編）『身体の構築学』ひつじ書房：357-413.

### 5.4.3＿外国語文単行書

◎ 書名の後に「,（半角コンマ）」。最後に「.（半角ピリオド）」をつける。
◎ 著者名は、姓、名の順で示す。著者が複数いる場合は、最初の著者のみ姓、名の順で示す。
◎ 著者が３名以上いる場合は、et_al.で略記することも可。
◎ 基本的に、著者名を示す際にKirp,D.のようなファーストネームの省略はしない。
◎ 編者は(ed.)で示す。
◎ 書名は斜体で示す。
◎ 書名の副題を示す場合は、「:」（半角）で区切って表す。

例
Peterson, Alan and Bunton, Robin (2002) *The New Genetics and the Public's Health*, London:Routledge.
Clifford, James and George E. Marcus (ed.) (1986) *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*, Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
Kirp, David L. and Ronald Bayer (ed.) (1992) *AIDS in the Industrialized Democracies*, New Brunswick: Rutgers University Press.

### 5.4.4＿外国語文論文

◎ 姓、名_( 出版年)_“論文名”_ 雑誌名( イタリックにする),_( 巻) 号: ページ数の順。
◎ 論文名は引用符で区切る。その際、最後のコンマを引用符の中に入れる。
◎ 単行書に所収の場合、「in」を付す。
◎ その他、基本的に欧文単行書の場合と同様に示す。

例
Kobayashi, Tadashi (1999) “Japan's reception of science in the light of social epistemology,” *Social Epistemology*, 13(3/4):251-256.
Bloch, Maurice (1992) “What Goes without Saying: _e Conceptualization of Zafimaniry Society,” in Adam Kuper (ed.), *Conceptualizing Society*, London and New York: Routledge, 127-146.

### 5.4.5＿翻訳単行書

◎ 原著単行書の挙示が必要な場合には、以下の形式で行う。
◎ 原著単行書の挙示のあとに、_ ＝（発行年）訳者姓名（訳）『翻訳書名』出版社の順。

例
Lave, Jean and Wenger, Etienne (1991) *Situated Learning : Legitimate Peripheral Participation*, Cambridge: Cambridge University Press. ＝（1993）佐伯胖（訳）『状況に埋め込まれた学習：周辺的状況参加』産業図書.

### 5.4.6＿翻訳論文

◎ 原著論文の挙示が必要な場合には、以下の形式で行う。
◎ 原著論文の挙示のあとに、_ ＝（出版年）訳者姓名（訳）「論文名」『誌名』（巻）号：
◎ ページ数 の順。
◎ 原論文のページ数が不明の場合は、省略できる。

例
Ihde, Don. (1999) “Technology and Prognostic Predicaments,” *AI & Society*, 13. =(2001) 中村雅之（訳）「技術と予測が陥る困難」『思想』926:145-156.

### 5.4.7＿インターネット上の資料

◎ オンライン上の各種文献に関しては5.4.1～5.4.6に準ずる。
◎ 他のオンライン上の資料に関しては、著者名、タイトル、URL、確認日等を、適宜、脚注に記載する。

### 5.4.8＿引用方法

◎ 文中でふれる場合、著者名［出版年］または 著者名［出版年：ページ数］という形で示す。
◎ 翻訳の場合は、二種類の発行年を「＝（全角イコール）」でつなぐ。著者名については、姓のみを示すことを基本とし、同一の姓のものがある場合に限り姓名の両方を表記する。

例
Beck［1986=1998］によれば、…
西川［2015:35］は…と論じているが、他方宮本［2017］の近著において…
⇒姓［出版年］本文…またはFamily name_［出版年］本文…とする。

◎ 引用して示す場合、前項の形式をそのまま括弧に入れた形で示す。

例
「…ではないだろうか」（内田［2015:110］）。
…という議論を展開している(Bauman［2000=2001:223］、田中［2010］、山崎編［2013］、MacIntyre［1984:177=1993:206］)。
⇒引用文（姓［出版年］、_Family name_［出版年］）。 とする。

（2017年8月）